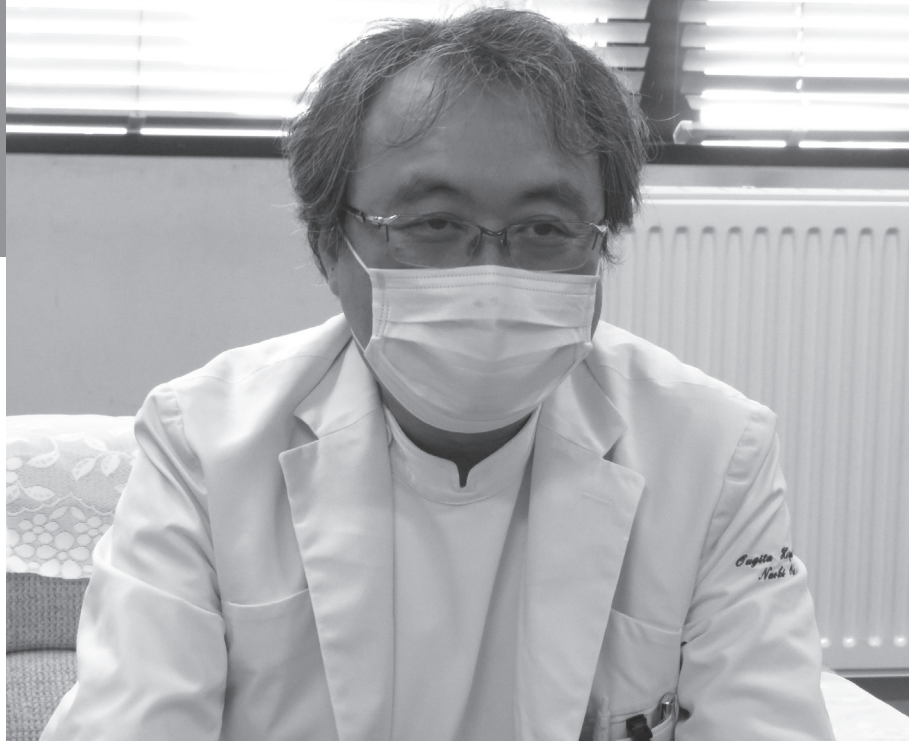
INTERVIEW

大館市立扇田病院 院長
大本直樹 先生



地域のニーズに応えて成長していくことが地域医療の原点

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

義務明け後，地元の病院の院長として

山田隆司（聞き手）　今日は秋田県の大館市立扇田病院に病院長の大本直樹先生をお訪ねしました．大本先生とは，今年のへき地・地域医療学会の幹事が北海道・東北支部なので，学会準備の会議の中でお話しする機会があり，扇田病院の現状について知りました．先生のこれまでのご経歴やここに至る経緯を伺う中で，先生の今後に少しでもお役に立てればと考えています．

まずは，先生が卒業されてからここに至るまでのことを紹介していただけますか．

大本直樹　私はここ比内町扇田の出身で，病院から歩いて15分くらいのところで生まれ育ちました．実は母が扇田病院の看護部長だったのです．そのため小さい頃から病院が遊び場のようなものでした．職員と一緒に病院旅行に行ったり，運動会に参加したりする中で自然と医者になると思っていたようで，小学校の卒業文集の将来の夢にも「医者になりたい」と書いていました．母子家庭であったこともあり自治医科大学が第一志望でしたので，入学できたことは本当に幸運でした．

山田　なるほど，そうだったのですね．先生は何期ですか．

大本　13期です．卒業後は横手市にある厚生連の平鹿総合病院で研修をしました．

山田　秋田県は県立病院がなかったですよね．自治医大卒業生はどこで研修することが多いのですか．

大本　私たちの頃は秋田大学でした．当時の秋田県は県に残れば何科を選んでもいいという風潮だったのです．そのためほとんどの卒業生は秋田大学に入局して，ストレート研修を行い教室員としてキャリアを積む人が多かったです．自分は地域の最前線で医療をしたいと思っていたので，実践的な研修を重視して忙しいという噂の中核病院を選び内科系をローテートしました．日常的に医局で寝泊まりするような２年間でしたが，診療スタンスをつくる上で有意義な初期研修でした．研修後，最初に赴任したのが阿仁町立病院です．阿仁町は人口約5,000人，古来マタギ(クマなどを狩猟する民)が多く暮らしてきた山間の土地です．

山田　阿仁町立病院は何床ぐらいなのですか．

大本　今は無床診療所になりましたが当時は70床ありました．秋田県は離島がないため中小規模の町立病院で義務を果たす形が多いのですが，阿仁は一番条件が悪いと言われていました．実際，私が赴任した時にはCTもカウンターショックもなく，とても救急患者に対応できる状態ではありませんでした．

山田　医師は何人ぐらいいたのですか．

大本　3人です．高齢の院長先生(外科)と内科医２人は自治医大の卒業生です．救急車を呼んでも，最寄りの救急指定病院に搬送されるまで１時間もかかるような地域でしたので，町内で発生した救急事案は町立病院にいったん運んでもらうようにお願いしていました．できるだけ早く医師の管理下に置く必要があると考えたからですが，１年の半分は自宅待機状態でした．そんな中でも週１回，午前外来終了後に片道２時間かけて秋田大学に実験に通いました．学位論文のため大学に１年間在籍した期間も毎週阿仁の外来に通い続け，義務年限の全てを阿仁で過ごしました．

山田　義務年限終了後はどうしたのですか．

大本　義務年限の終了に学位取得と母の定年退職のタイミングが重なり，故郷である比内町立扇田病院(150床)に戻ることを決意しました．

山田　この病院もその当時やはり医師不足だったのですか．

大本　そうですね．自治医大の若手が年間２～３人ずつ派遣されていて，医師数は10人くらいで，ミニ総合病院的に各科の先生がいました．ところが2002年に私がここに着任してすぐに院長先生が病気で退職され，後任が決まらず，いきなり私が院長に就任することになりました．まだ37歳で，やっと学位も取って，やりたいこともこれからという時だったのですが．

山田　まだ臨床に興味があって，マネージメントや職員の雇用，自治体とのやり取り等にはあまり関心がない年代ですよね．

大本　はい．院長会議に出席すると親子ほどの年の差のあるような先生方ばかりで，場違いなところに座っている感じでした．

山田　でも150床の急性期の病院だと，救急の受け入れもあるし，やらなくてはいけないことが多かったのではないですか．

大本　毎年毎年の医師確保が一番大変でした．病院を取り巻く環境がどんどん変わってしまって，特に新臨床研修制度が始まって，大学の医局から地域に派遣される若い先生たちが極端に減った時が一番堪えました．地元出身の高齢の先生と自治医大の義務年限の先生方と自分で，何とか５人から６人の常勤医を確保して毎年やりくりしてきたという感じです．